重習
直入
姥捨

特116
684

始

特116
684

姨捨

概説

内六巻ノ三

都の者中秋明月の夜信濃國姨捨山に到りて月を賞しゐける處に、一人の女出で來れるより、昔此山に姨を捨てたりと言ひ傳ふる舊跡を尋ね、尚さまざまの物語りなどしけるが、眞は我こそ此山に捨てられし女なれとて姿をかくしぬ。やゝありて白衣の老女現れ來り、月の盈虧につきて有為轉變の定め無き世の様などを說き、月下に遊舞の袂をひるがへしけるが、いつか旅人は歸り去りて老女のみ又此山に獨り殘りけり。

大正
11. 4. 15
内交

小書　弄月舞　前後替

役別	ワキ	前シテ	後シテ
	男	里女	老女
裝束附	着附段熨斗目　素袍上下　紋付腰帯　扇	面深井　鬘　無色鬘帯　着附摺箔　無色唐織	面姥　姥鬘　鬘帯　着附摺箔　白大口又ハ浅黄　白地長絹　老女扇

季	八月	曲柄	三番目
所	信濃國更級郡姨捨山	稽古順	重習別傳

姨捨(ヲバステ)

世阿彌元清作

ワキ男上 次第 ヨワク 拍子ニ合
月の名近き秋あれや。月の名近き秋あれや。姨棄山を尋ねん

ワキ詞
かやうに候者は。都方に住ひ仕る者にて候。われ未だ更科(サラシナ)の月を見ず候程に。此の秋思ひ立ち姨捨山へと急ぎ候

道行上
此の程の。

暫し旅居の假枕。暫し旅居の假枕。又立ち出づる中宿の。明し暮して行く程に。これぞ名に負ふ更科や。姨捨山に着きにけり姨捨山に着きにけり

（ワキ詞）さてもわれ姨捨山に来て見れば。嶺平かにして萬里の空も隔なく千里に隈なき月の夜さこそと思ひやられて候。今夜はこの所にやすらひ。今宵の月をも眺めばやと思ひ候

（シテ女）なうなうあれなる旅人の何事を仰せ候ぞ

（ワキ）さん候これは都の者にて候が。始めて此の所に来りて候。さてさて御身はいづくに

住む人ぞ シテ「これは此の更科の里に住む者にて候。今日(ケフ)は名に負(オ)ふ秋の半(ナカバ)。暮るゝを急ぐ月の名の。殊(ゴト)に照り添ふ天(アマ)の原(ハラ)。隈なき四方(ヨモ)の景色かな。いかに今宵の月の。面白からんずらん ワキ「さては更科の人にてましますかや。さて／＼古

姨捨の。在所(ザイシヨ)はいづくの程にて候ぞ

シテ「姨捨山の亡き跡と。問はせ給ふは心得ぬ。（中拍子ニ合ハズ）我が心慰めかねつ更科や。姨捨山に照る月を見てと詠ぜし人の跡ならば。これに木高(コダカ)き桂の木(キ)の陰こそ。昔の姨捨の。その亡き跡(アト)にて候へとよ ワキカヽル「さてはこの

木の陰にして、捨て置かれにし人の跡の。シテ「そのまゝ土中に埋れ草。かりある世とて今ははや。ワキ「昔語になりし人の。なほ執心や遺りけん
シテ「なき跡までも何とやらん
ワキ「物凄しきこの原の。シテ「風も身にしむ
ワキ「秋の心。上歌 拍子合 今とても。慰めかねつ更科や。慰めかねつ更科や。姨捨山の夕暮に。松も桂も交る木の。緑も残りて秋の葉のはや色づくか一重山。薄霧も立ち渡り。風凄しく雲つきて寂しき山の。景色かな寂しき山の景色かな
シテ「旅人はいづくより来り給ふぞ

ワキ「されば以前も申す如く都の者にて候が更科の月を承り及び始めてこの所に来りて候よ　シテ「さては都の人にてましますかやさあらばわらはも月と共に現はれ出でて姨捨の夜遊を慰め申すべし　ワキ「そもや夜遊を慰めんとは御身はいかなる人やらん　シテ「真はわれは更科の者

ワキ「さて今宵はいづ方よ　シテ「住み家といはんもこの山の　ワキ「名にし負ひたる　シテ「姨捨の　「それといはんも恥しや　それといはんも恥しやその古も捨てられてただ一人この山にすむ月の名の秋毎に執心の闇を晴さん

とく今宵現れ出でたりと。ゆふ陰の、木の本にかき消すやうに。失せにけりかき消すやうに失せにけり

中入間

ワキ上歌 待謡
「夕陰るぐる月影の。夕陰るぐる月影のやや出でそめて面白や萬里の空も隈なくて。いづくの秋も隔てなき心も澄みて夜もすがら三五夜中の新月の色。二千里の外の故人のこころ

後シテ女中ニ 一声
「あら面白の折からやな。あら面白の折からや。明けばまた秋の半もすぎぬべし。今宵の月の惜しきのみか。さなきだに秋待ちかねて類なき。名をもち月のみんだにも。

覺えぬ程に隈もなき。姨捨山の秋の月。餘りに堪へぬ心とや。昔とだにも思はぬぞや。ワキ 不思議やなはや更け過ぐる月の夜に。白衣の女人現れ給ふは夢か現か覚束なや。シテ 夢とはなどや夕暮に現れ出でし老の姿。恥かしながら

来りたり。ワキ 何とか包み給ふらん。固より所も姨捨の シテ 山の老女が住み處の ワキ 昔に帰る秋の夜の シテ 月の友人まとゐして ワキ 草を敷き シテ 花に起き臥す袖の露の シテワキ二人 光も色々の夜遊の人に。いつ馴れ初めてうつろひや 盛り更けたる女郎花の

盛ふけたる女郎花の。草衣しをたれて。昔だに捨てられし程の身を知らで。又姨捨の山に出で。面を更科の月に見ゆるも恥かしや。よしや何事も夢の世の。なかなか云はじ思はじや。思ひ草花にめで。月にそみて遊ばん。げにや興に

ひかれて来り興つきて帰りしも今の折かと知られたる今宵の空の気色かな。然るに月の名所いづくはあれど更科や。姨捨山の曇なき。一輪満てる清光の影。団々として海嶠を離る。然れば諸仏の御誓ひ。何れ勝劣なけれ

ども超世の悲願普き影。弥陀
光明にしくはなし。さる程に三
光西に行く事は。衆生をして西
方に。勧め入れんがためとかや。月
は彼の如来の右の脇士として。
有縁を殊に導き。重き罪を軽ん
ずる无上の力を得る故に大勢至

と号すとかや。天冠の間に。花の
光かゝやき。玉の臺の数々に。他方
の浄土を顕す。玉珠楼の風の
音糸竹の調とりどりに。心ひか
るゝ方もあり。蓮色々に咲き交る。
寶の池の辺に。立つや並木の
花散りて芳芬しきりて乱れたり

シテ上 迦陵頻伽のたぐひなき。聲を
たぐへて。諸菩薩。孔雀鸚鵡の同
じく囀る鳥のおのづから。光も
影もおしなべて。至らぬ隈も
なければ。無邊光と名付けたり。
然れども雲月のある時は影
満ちず或時は影缺くる。有爲
轉變の世の中の定めのなきを
示すなり 昔戀しき夜遊の袖 序之舞
ワカ上 我が心。慰めかねつ。更級や
地上 姨捨山に照る月を見て照る月
を見て 月に馴れ。花に戯るゝ秋
草の露の間に。露の間に。なか
なか何しに現れて。胡蝶の遊び

戯るゝ舞の袖。返せや返せ。

昔の秋を思ひ出でたる妄執の

心やる方もなき。今宵の秋風。

身にしみじみと。戀しきは昔。し

のばしきは閻浮の。秋よ友よと。

思ひ居れば。夜も既にしらしら

と早あさまにもなりぬれば。

われも見えず旅人も歸るあと

に。獨り捨てられて老女が

昔こそあらめ今もまた姨捨山

とぞなりにける。姨捨山となり

にけり

大正拾一年四月拾日印刷

同　年四月拾五日發行

著作權所有
複製不許

著作者兼發行者　廿四世　觀世元滋

印刷者　京都市上京區二條通麩屋町東北角　檜常之助

發行所　東京市神田區錦町一丁目拾番地　檜大瓜

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂

終